

豊庄だより



第 666 号 2021 年 6 月 28 日

福岡市早良区南庄 2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

2 週連続して月曜日の朝の会で、カタツムリの話をしたせいかもしれません（※6月21日は夏至だったのに、そのことを話すのをすっかり



忘れていました）。図書室前に置いたカタツムリをいれた飼育箱の前で親子の会話をよく耳にします。「何がいるの?」、「カタツムリだよ」。「でも、見えないね」、「隠れているんだよ」。そこに私が登場して、「夜は見えるところにいるのですが、昼間は苦手みたいで、天井にくっついてます。飼育箱の中には、キャベツ、ニンジン、卵の殻を入れ、乾燥しないように霧吹きで水をかけています。」などと話しています。

カタツムリは面白い生き物です。保育園の図書室にある図鑑で調べると、「カタツムリは陸に住んでいますが、貝の仲間です。飼育は乾燥しないように心がけましょう」と書いてありました。もう少し詳しく書かれている本はないかなとを探し、荒俣宏著『世界大博物図鑑』（平凡社）を久しぶりに開いてみました。「この本は実にユニークな」というと著者に失礼かもしれませんが。よくある図鑑と異なり、「博物」という名がついている通り、人間の文化と生き物の歴史がたくさんの図録を載せて（総ページ 500 ページを超える。1冊の値段もボリュームあり!）、編集されています。「博物学者荒俣宏、ここにあり!」という充実した内容です。荒俣さんは時々テレビにも登場し、その博識ぶりを発揮されていますが、ちょっと過ぎるところもあるようで、この本にも、「バッタ」のところに、「仮面ライダー」のことが写真入りで紹介されていました。



話を戻します。カタツムリが載っているのは全 5 巻で構成された図鑑の第 1 巻目「蟲類」。「蟲（むし）」という

日ごろ使われてない漢字をあえて使っている説明から、この本は始まります。その説明を紹介すると、その

ことだけで終わってしまいそうなのでここでは省きます。「カタツムリ」は、「名の由来」、「博物誌」、「鳴くカタツムリ」、「エスカルゴ」、「恋矢（れんし）」、「ことわざ・成句」の 6 項目に分けての説明があり、どれも興味深いのですが、分量が一番多いのはやはり「博物誌」の説明。そこには、西洋にあっては、カタツムリは怠惰の象徴とされたこと、夢に現れるカタツムリは本人自身の投影であるという説（心理学者ユングによる）、天の川はカタツムリの這った跡……。読んでいて飽きません。

蛇足ですが、カタツムリの次には、ナメクジが登場しています。ナメクジのことをドイツ語では、「裸のカタツムリ」、「家を持たないカタツムリ」と言うそうです。二つとも陸に住む巻貝で、同じ仲間という扱いです。巻貝ということは大昔は海で生活していたのでしょうか？だとしたら、ナメクジは大変です。すぐに溶けてしまわなかったのでしょうか？この疑問については、残念ながら荒俣さんの本は答えてくれませんでした。

